Ⅰ 春の花を愛でる

■指定記号のうち、◉は国宝、◎は重要文化財を示しています。

番号	指定	名　　称	摘　　要	時代	材　質	法　量（cm）
1	◉	寝覚物語絵巻		平安後期	紙本著色	26.0×533.0
2		花卉図扇面		江戸前期	紙本著色	幅55.3
3		人物図扇面		江戸前期	紙本著色	幅54.7
4		桜図	俵屋宗達筆	江戸前期	紙本墨画	105.2×45.1
5		白梅図小袖断片	伝尾形光琳筆	江戸中期	綸子地著色	74.9×44.4
6		春柳図	尾形乾山筆 元文４年(1739)自賛	江戸中期	紙本墨画	24.3×45.3
7		春林書屋図	呉春筆	江戸後期	絹本著色	107.8×40.0

Ⅱ ふたつの季節を味わう

8		伊勢物語図屏風	六曲一双　八橋・布引図	江戸中期	紙本金地著色	各154.7×354.2
9		春秋鷹狩茸狩図屏風	岡田為恭筆　六曲一双	江戸後期	紙本著色	各152.6×359.0

Ⅲ 夏の光のなかで

10		草花図屏風	伊年印　六曲一隻	江戸前期	紙本金地著色	136.5×298.5
11		瓶花図	酒井抱一筆　文化12年(1815)	江戸後期	絹本著色	98.6×35.5
12		花鳥図	松村景文筆　双幅	江戸後期	絹本著色	各102.8×36.0
13		神奈川風景図	谷文晁筆　享和２年(1802)	江戸後期	絹本著色	41.7×69.7
14		海浜漁夫図	司馬江漢筆　寛政11年(1799)	江戸後期	絹本墨画淡彩	30.5×31.0
15		暑中芙蓉峰図	森徹山筆 古波蔵親方(鄭嘉訓)賛	江戸後期	絹本墨画淡彩	100.9×35.6

Ⅳ 四季をそろえて

16		稲富流鉄砲伝書	19帖のうち　慶長17年(1612)	桃山		
		百拾三箇條巻二			紙本金銀泥下絵墨書	25.6×254.4
		百拾三箇條注巻三			紙本金銀泥下絵墨書	25.6×975.2
		八町迄切筒積巻六			紙本金銀泥下絵墨書	25.6×275.6
		極位薬積之書			紙本金銀泥下絵墨書	25.6×742.0
17		四季花鳥図押絵貼屏風	渡辺始興筆　六曲一双	江戸中期	紙本著色	各 第1･6扇 125.5×49.7 第2-5扇 125.5×51.2
18		四季山水図屏風	円山応挙筆　六曲二双 天明７年(1787)	江戸後期	紙本墨画淡彩	各155.3×361.5

Ⅴ 秋から冬へ

番号	指定	名　　称	摘　　要	時代	材　質	法　量（cm）
19		新古今集和歌色紙	本阿弥光悦筆　慶長11年(1606) 新古今集・難波の歌	桃山	紙本金銀泥墨書	20.0×18.0
20		観世流謡本 藍染川	観世身愛(黒雪)奥書 慶長11年(1606)	桃山	紙本金銀泥墨書	24.9×17.7
21		僧正遍昭落馬図	英一蝶筆	江戸中期	紙本著色	27.6×53.8
22	◎	武蔵野隅田川図乱箱	尾形乾山筆　寛保３年(1743)	江戸中期	木製墨画著色	高5.8×27.3×27.5
23		東山三絶図	円山応挙筆　天明６年(1786)	江戸後期	紙本墨画	40.3×81.4
24		鱈図	円山応挙筆	江戸後期	紙本墨画	22.4×117.8
25		雪汀双鴨図	円山応挙筆　安永３年(1774)	江戸後期	絹本著色	94.8×34.8

展　観　内　容

季節感が希薄になったといわれる現代でも、すこしあらたまった手紙は、時候の挨拶から始めるという作法は失われていません。それは、四季の変化に富むこの国に住む私たちが、季節をいとおしむ感性を共有していることの証しでしょう。

日本絵画の世界でも、平安時代に、春夏秋冬の自然景に、折々の行事や祭礼などをたくみに織りまぜた「四季絵」が生まれて以来、季節の表現は欠かせないものとなります。

本展では、そうした四季絵の伝統をくみながらも、江戸時代ならではの感性で季節の表情をとらえた作品を展示します。蕪村（ぶそん）の句に「秋きぬと合点させたる嘆（くさめ）かな」という、『古今和歌集（こきんわかしゅう）』の秀歌をもじった一句がありますが、その軽妙なユーモアは、展示作品のひとつ、女郎花（おみなえし）に気をとられて落馬する高僧のあられもない姿を、英一蝶（はなぶさいっちょう）がとらえた「僧正遍昭落馬図（そうじょうへんじょうらくば）」にも通じます。

さらに、四季を一望のもとに眺め渡すことのできる四季絵屏風や、春秋、夏秋をとり合わせる二季の屏風もあわせて公開します。

平成最後の年の瀬、年号が改まろうとも、かわることのない悠久の四季の巡りを、絵の中にお楽しみください。